

いる愛情は、いわば、私達の未来をも含めて、性生活の不思議な陰面と陽面のかたちを暗示しているがごとくである。このような生活の微妙な深さは、バクーニンの思想の大きさに劣らず、私達の生の全体にとって示唆的である。大沢正道の『バクーニンの生涯』をはじめとして、この種の緻密な仕事で、これから多くなされることが望ましい。

思想の部面における現在の大きな主題は、社会主義「国家」における権力の在り方の分析であろう。国家が軍隊と警察という暴力によって支えられていることは現在でも変化していないが、そこには怖るべき内容の変化があつて、原子爆弾を背負わなければならぬ時期に遭遇した社会主義「国家」は、もし自覚的であれば、この上もない怖るべき難題に直面しているのである。これまでの武器は自覚的な操作によって、敵を狙うことをやめ、敵を捕虜にし、さらに、味方にさえしてしまふことの可能性を与えるところの武器であり、換言すれば、抑圧の武器はまた革命の武器へ転化し得るものなのであつたが、現在、益々発達しつつある原子力兵器は、敵のなかの味方を判別し得ない点で怖るべきものであるのみならず、発射する兵士に敵を直視し、自己の判別力を自覚する契機をまったく与えず、国家の意志がすべてをひきうけてしまふとする巨大な無思想性においてさらに怖るべきものなのである。このような巨大な無思想性の怪物に成長するに至つてしまふとき、国家はもはやついに死滅することなどできない。もし自己の現実について自覚的であれば、これこそ社会主義「国家」が直面しているところの一つの怖るべき難題なのである。

アナキズムの見地から深い分析と鋭い考究がこの現代の巨大な主題に対してなされることを私は望みたい。

クロンスタット (1)

—1921年—

訳者まえがき

「知られざる革命」は、ヴォーリンの死の直前一九四五年に完成した。これは一八二五年十二月党勃興の年から一九二二年すなわちボリシエヴィキによってアナキストの運動が決定的な潰滅へと追い込まれた年までのロシア人民の革命運動の膨大な研究書である。ここに訳出した「クロンスタット——一九二一年——」は「知られざる革命」の第二巻第一部にあたる。この書の第二巻第二部は一九一八年から一九二一年にかけてロシアのウクライナ地方に起つたネストル・マフノを中心とするアナキズム運動を扱つた「ウクライナ——一九一八—一九二一年——」であり、これも、引き続き翻訳発表したいと思つている。ヴォーリンの本名は Vsevolod Mikhailovich Eichenbaum といひ、一八二二年にロシアに生まれ、一九〇五年の革命に参加、一九〇七年フランスへ亡命、一九一五年反戦活動のためフランスを追放さ

ヴォーリン
谷 千香子 訳

スペイン革命の
教えるもの
V・リチャーズ著・遠藤斌訳
1936—1939年スペイン人民は真の社会革命への道を開いた。豊富な史料を駆使してその真相を語るアナキストによる本邦最初のスペイン革命文献！

川崎市新丸子東一の
八三三 甘露書房
自由思想研究会
(振替東京四四六九〇)

B6 上製箱入美本
三二〇円(千五百円)

自由思想の会編集

自由思想 5号

権力の本質とその意義	長谷川 進
ソビエト権力	マクシモフ
禅・華嚴・アナキズム	市川 白弦
大逆事件の思想的背景	幸徳秋水の(下) 遠藤 斌 直接行動論
宿命論の一地点—萩原朔太郎覚書	伊藤 信吉
思い出すまに(3)	近藤 真柄
わが生涯を生きて	エマ・ゴールドマン
パブロ・カザルス来朝に寄せて	スペイン難民救済会 日本友の会
テロリズムをめぐって	久保・高島・田戸・小松
[登壇] エマ・ゴールドマン	大沢 正道

れてアメリカに逃れ、優れたアナキストとしてロシアの十月革命に参加した。彼はベトログラードでアナルコサンジカリストの機関紙「労働者の声」を編集していたが、ボルシエヴィキに弾圧されたため黒海からロシアへ侵入してきた白軍を防衛するうえに決定的な役割を演じながら、自由共産社会の建設を試みたマフノ運動に加わり、そこでの中心人物の一人となった。ボリシエヴィキはマフノ運動に対してもクロンスタット・ソヴィエトに対すると同様、白軍防衛にその果敢な斗争力を利用するのみでロシア革命の真の担い手である人民の自主組織を撲滅し、ボリシエヴィキの官僚的政治権力に批判の眼をむける革命家や人民を反革命主義者として弾圧投獄した。ヴォーリンは、その後ボリシエヴィキの犠牲者の一人としてベルリンに亡命、のちパリへ移り、隠れ家を転々としながら本書を書き続け、一九四五年秋に死ぬ少し前に完成した。

大杉栄がベルリンのアナキスト大会へ出席しようとヨーロッパへ行った時、彼はベルリンにいるヴォーリンに会つてぜひマフノ運動の全体や詳細について知りたいと切望していたのだが、パリで投獄されたりして果さなかつた。クロンスタットに関してはアメリカからロシアへ強制送還されたアナキスト、ベルクマンがその眼で見て「クロンスタットの叛逆」を書いた。最近パンフレットとして刊行されたが、これはぜひ合わせ読む必要のあるものである。

一九一七年当時とその後の期間に、(一九一七年十月革命の後にロシアで起った) 権利を求める反動的運動とは無関係にやはり全く反対の方向への一連の運動が起った。それらの運動は革命的な運動であった。それらの運動は真の自由の名において、またボリシエウイキの権力が嘲笑し、足下に踏みにじったところのその社会革命の原理の名において、ボリシエウイキ権力と闘った運動であった。

実際、政府やまた共産党自身の下部のうちにさえも、窒息しそうな国家主義、集権主義、官僚主義への恐るべき傾向、隠れようもない社会的無気力さ、またボリシエウイキの恥知らずな暴虐のために、反対と逆の動きは助長されていた。

それは次のようなことだった。一九一八年の夏に、それまで政府に参加していた左派社会革命党はそこを離れ、ボリシエウイキと決裂して彼らに反対する声明を行った。左派社会革命党はすぐに抑圧の一撃のもとに終熄させられた。

それに続いてボリシエウイキ党自身の内部に、レーニンをして「左翼小児病」と題するパンフレットを出させた最初の表明である、「労働者反対派」と呼ばれるものが現われた。この「労働者反対派」は執拗な圧迫の繰り返し行われる攻撃によって同じく潰滅させられたのであった。それは毎度、政府内及び党内における他の運動によって引き継がれた。だがそれらの運動のすべては同様に容赦のない残虐さで抑圧された。

厳密に政治的であり、かつまたしばしば(彼らの党批判において) 全く穏和であったすべてのその運動は本質的な重要さをほとんど持たなかった。コトリン島は幅のせまい長細い不規則な十二キロメートルの長さの海岸線をもった島である。その島の幅は最も長くて二キロメートルから三十キロメートルである。その岸壁は近付き難く堅固に守られている。レニングラードに面した島の東部はクロンスタットの町や港やドックを含んでおり、全面積の三分の一を占めている。北と西と南の海岸は堡壘や稜堡が散在している。それらの海岸から都市までが、一九一七年の革命当時全くひどく荒廢したのであった。北と南にむかって多くの堡壘と稜堡がその島をとりかこんでおり、沖の方までかなり突き出していた。海上を二十キロメートル離れた本土の岬には島に面してクラスネヤ・ゴルカの重要な堡壘があった。他の海岸には島の北岸に面して海上十キロメートルのところにリシ・ノスと呼ばれる頑丈に守られた岬がある。

都市の内部で最も注意を引く特異なものは「錨広場」である。この広場は三万人の収容力があり、もとは兵隊の訓練と軍隊の閲兵式に使われていたものだ。革命の期間中、それは定期的な大衆の集会所となった。召集されるときはいつでも、またどんな些細な警報にも水兵や軍人や労働者たちは巨大な集会を開くべく、そこへ馳参したのであった。冬には広大な「海の上の学校」がその同じ役目を果たした。クロンスタットの住民はまず第一に広い兵舎に寝起きするバルチック艦隊の乗組員たちであり、ついで守備隊の兵士たち、主に砲兵、そ

たなかった。きっと未来の歴史家はこれらの内にその政体を描き批判する為の非常に役立つ材料を見出すであろう。しかしながら革命とその運動という見地から見ると、それらの運動はそれらの引き起した折々の斗いの激烈さを除いて、根本的には「お家騒動」であった。もし反対者や謀叛人らが勝ったとしてもその国は本質的な状態においては何らの変化もなしに主人を変えただけであらう。その新しい権力者は、不可避免的に彼らの先任者の政策や手段を採用したにちがいない。人民の方は何の変化も蒙らなかつたであらう。あるいはむしろ格言のいうように「変化すればする程同じ物が残る」となるであろう。本質的に人民的であり、大衆の運動であり、非政治的であり、まさしく社会的、真に革命的であった種々の最左翼の運動がしばしば起った——時には大規模に——のは、これらの「御殿」騒ぎの外部においてだった。

我々はそれらすべての運動の中から最も注目すべき、最も重要な、(アナキストの諸団体以外のところでは) 最も知られていない二つの運動に第一に注目しよう。それは一九二一年三月のクロンスタットの運動と一九一八年から一九二一年の終りに至る四年もの間続いたウクライナにおける広範囲な活動的運動とである。

【訳註】この序文は「クロンスタット」と「マフノ運動」の二部を納める「知られざる革命」第二巻のはじめに書かれたものである。

第一章 序論

クロンスタットはフィンランド湾の奥にあるペテルブルグ(現在のレニングラード)から三十キロメートル西にあるコトリン島に二世紀前に建てられた要塞、あるいはむしろ要塞都市である。それはバルチ

して最後に多くの将校、官吏、商人、熟練工等々を包含しており、全部で五万人程であった。

第二章 革命前のクロンスタット

バルチック艦隊とクロンスタット守備隊が、ロシア革命においてまず第一に重要な役割を演じた。多くの要因がこれに帰せられるのである。第一に水兵はその大部分が労働者階級から応募せられたものであった。海軍は労働者階級の中から通常、最も質のよい、最も教育のある精鋭の新兵を選び出したのだった。しかしこの種の労働者はまた、政治的に最も急進的であった。海軍に従軍する以前にすでに彼らはしばしば、芽ばえ始めた革命論者であり、時には活動的な斗士でさえあった。規律や監督があるにもかかわらず、彼らは必然的にその戦友達の上に強い影響を及ぼした。

さらにその上、水兵らはしばしば彼らの義務から諸外国を訪れたので、それらの国の比較的自由な政体をロシア帝国の政体と比べてみるに好都合だった。軍隊を含めて他のどんな地方の人民よりも、彼らは諸政党の思想や綱領を吸収し得た。一方彼らの多くは、(西欧における) 亡命者達と関係を保ち、亡命者達の発禁の秘密文書を読んだ。

また当時の首都に近かつたことはその首都の強い政治的、知的、産業的活動と共にクロンスタットの人々の教育に多大な貢献をしたことを付け加えておこう。ペテルブルグの「政治生活」は、まさに最盛期にあった。軽視できない多数の労働者と、大学における無数の勇敢な青年達がいた。革命的諸グループの活発な活動や、非常にしばしばまき起る、威圧的な騒乱やデモンストレーションや、また時にそれに伴う乱斗や、あるいは政治的、社会的事件との絡じて急速かつ直接的な

接触。これらはすべてクロンスタットの人々に、この国の国内生活や大衆の熱望と奮闘や、また当時の政治的・社会的諸問題への興味の目を見ひかせた。

実際ペテルブルグはクロンスタットをいつも緊張させ、時には熱狂の渦中におくのであった。すでに一九〇五、六年と一九一〇年にクロンスタットの水兵らはかなり重大な叛乱を試みた。だがそれは厳酷に圧殺された。しかし彼らの精神はさらに猛々しく生き続けていた。

ついに一九一七年の革命の最初の時期から最左翼の諸派、すなわちボリシエヴィキ、左翼社会革命党、マキシマリスト、サンジカリストアナキストらはすべて活動的な、よく組織された中核をクロンスタットの中につくった。そして彼らの活動は、ただちに水兵達の群の上に重大な影響を与えたのであった。

第三章 革命の前衛部隊としてのクロンスタット

一九一七年二月から革命の継続期間中ずっと、ほとんどいたるところでクロンスタットの人々は戦斗のまっ只中にいた。地方的活動は盛んであったが、彼らはそれだけに専心するようなことはなかった。革

命的狂熱と戦斗的情熱に充ち満ち、力と大胆さにあふれ、自分達の役割をよく自覚し、彼らは迷うことなく彼らに要求されたすべてのこと——彼らの火と燃える熱情と、彼らの信義と、彼らの意識と、彼らの精力——を革命に与えた。彼らは生命の犠牲を決意している献身的な斗士となった。彼らはアジテーターや人民のプロパガンディストや、また全国にわたる革命的文献の配布者、あらゆる種類の技師、そしてまたさらに肩を並べる者もない斗士となった。

一九一七年二月、クロンスタットは急速に革命の渦中に結集した。蜂起し、都市を占領した水兵達は悲惨な、しかしながら彼らの意見では、必要な活動を遂行することを任務と感じた。二月二十七日と二十八日の晩に彼らは約二百名の悪名の高い反動的上級將校らを捕え、たちどころに処刑した。長年月にわたってう積してきた怨恨と憎悪はこのようにしてはらされた。なぜならこの犠牲者の中には、試みに終った一九一〇年の叛乱の時、数百の水兵を銃殺しよう命じた人々がいたからだ。これはトットルベン要塞で捕縛された船員たちを溺死させたという有名な事件とそっくりだった。

これら二百名の將校の処刑は単なる流血のエピソードであるにすぎない。というのは水兵達は彼らが尊敬し好意をもっていた將校達ばかりでなく、抑圧の期間に暴挙をひかえていた將校達をもできるだけ保護したからだ。(蜂起の) 全期間を通じて水兵らの各グループは、暴動中にいなくなった自分達の將校を限なく探した。たずねる將校がほかの水兵らによって逮捕されているのを知ると彼らは將校を釈放し、艦やあるいは兵舎に安全に置いた。

水兵らはすぐにクロンスタット最初のソヴィエトを組織した。最初それは非常に穩かなものだった(そのメンバーの大部分が右派社会革

命党とメンシエヴィキだった) から、このソヴィエトは革命的大衆の圧力によって臨時政府との鋭い衝突を起すことをよぎなくされた。これらの衝突の直接の原因は重要なものではなかったが、底に横わる意味は深刻なものであり、大衆はそれをよく理解していた。臨時政府はクロンスタットの人々の独立精神や熱烈な活動も容赦しなかった。政府はどんな犠牲を払ってもその独立精神を打ち壊し、その熱烈な活動力を失わせようとした。要するに不満の徒を制圧し、都市を完全に服従させようとしたのだった。

最初の衝突は妥協的におさまった。多くの会合や討議の後にクロンスタットの人々は時の経過に委ねるのが賢明だと考えた。それと同時にソヴィエトの虚弱な態度にあきたらず新しい代表を選びなおした。

まもなく臨時政府との間に新たな衝突が勃発した。再びその衝突を忍耐し通した終りには、クロンスタットはまさに蜂起寸前の状態にあった。そしてただ国民はこの時期尚早の行動を決して理解しないだろうという考えだけが水兵たちを思いとどまらせたのだった。

クロンスタットに対する最初の中傷が、ブルジョア新聞によって捏造され、ロシア内外に流布されたのはこの時期であった。「クロンスタットはロシアから脱退し、自治共和国であることを公言している」「クロンスタットはドイツと独自の平和をとり結ぼうとしている」これらは言い触らされた馬鹿げた事柄のいくつかである。これらの目的とするところは、国民の眼識においてクロンスタットの信用を失墜させ、引き続いて困難なくクロンスタットをぬぐいさることができるということであつた。

最初の臨時政府はこの計画を遂行する暇がなかった。それは一般民衆の敵意のうちに落ち目になっていた。それにひきかえクロンスタ

ットは大衆の観点からいって人氣を勝ち得た。

第二のクロンスタット・ソヴィエトは(先のソヴィエトに比べて) さらに左翼から離れていた。それは多くのボリシエヴィキ黨員、何人かのマキシマリスト、何人かのアナキスト(註1)を含んでいた。しかし、ソヴィエトの活動と、性質の異なる党派間のソヴィエト内部における避けがたい斗争とは、船上での、兵舎での、工場の中での労働者自身の間において続けられた大きな斗争と比較すると取るに足りないものだった。鋪広場における相継ぐ會議では革命におけるあらゆる問題が討議され、すべての視点から検討された。人々は緊張した情熱的な日々を送っていた。このようにしてクロンスタットは自らを教育し前進的諸斗争において、革命のすべての段階において、ロシアのすべての地域において間もなく演じるようになったところの非常に活動的な役割を準備していたのであった。

註1 多くの理由からソヴィエトにおけるアナキストの存在はどちらかといえば珍らしかった。クロンスタット以外ではペトログラードとモスクワのソヴィエトに数人のアナキストがいた。他の所ではソヴィエトにアナキストはほとんどいなかった。ソヴィエトに対するアナキストの一般の態度については、これはソヴィエトの発展につれて変化したのであった。最初ソヴィエトはまだ労働者の機関としての性格をもっていた時分は好意的であった。だがある有効な機能をそれらが十分提供するであろうという希望を革命の勢いが人々に抱かせるようになると、彼らの態度は今度は懐疑的になり、そしてソヴィエトが政府によって操縦される政治的機関に変貌したときには、ついに全く否定的となった。このようにアナキストは、はじめはこれらの制度への彼らの同志の選出に反対でなかったが、

後にはひかえ目になり、次のように宣言することによって終った。
「権威主義者と中央集権主義者と統計家の基礎の上に組織されている純粹に政治的な組織となつたソヴィエトへのすべての参加に対して無条件に決定的に反対する」(一九一九年四月エリザベスにおけるナバト會議の宣言文)

初め水兵らはケレンスキーに好意的だった。しかしまもなく彼らはケレンスキーの眞の任務が何であるかを悟った。そして有名な六月十八日の不成功に終つた攻撃の二週間後、クロンスタットはケレンスキーとその政府に対して決定的に對立する立場をとつた。クロンスタットのうちに敵對的感情のあるのを知つたケレンスキーは水兵らがベトログラードへきたとき、多くの水兵を捕縛しようとし、また他の抑圧的手段をもとろうとした(「クロンスタットの敵對心が増大したのはこの時であつた。」)

ベトログラードでは革命的な機關銃連隊が武器をもつて、前線に送られることに反対し、その騷擾は銃火をおこつた。その時七月四日に一万二千のクロンスタットの水兵、軍人、労働者の男女が赤旗や黒旗や「すべての権力をソヴィエトへ」というスローガンのプラカードをもつてベトログラードに上陸した。デモ隊員らは冬、宮殿にむかつて行進した。そこではポリシエウイキを含む種々の党派が政治情勢を論じている最中だった。彼らは政府を打倒し、ソヴィエトによって政府をおきかえるまでに斗争を押し進めようと、彼らのデモ行進をもっと広げ、一般群衆や都市の守備隊をもさそひこむことを望んだ。彼らの手本は続かなかつた。政府を支持する群衆と路上で小競合をし数人を失つた後、彼らは敗北を悟り、何もなしえずにクロンスタットへひきあげた。新たな革命はまだしかるべき時に至らなかつた。

すでにクロンスタットに影響をもつていたアナキストはその日の活動に活発な役目を果し、数人を失つた。しかし本質的には大衆の数千の叛徒達の運動であつた。

七月が終ると、ブルジョア新聞は再び中傷をクロンスタットにむけた。叛乱は「ドイツの金で」組織されたのだ、とほのめかし(彼らはひとりの水兵が一日につき二十五金ルーブル払われているのだ、とまで言つた)、国家への背反だと言つた。社会主義系新聞も声を合わせてその運動は「不審な要素」のしわざだと暗示した。この宣伝はケレンスキーをして激しい迫害でクロンスタットをおびやかすことを得せしめた。しかし我々が知るように彼はあえて行動しはしなかつた。

クロンスタットの人々は決して少しも驚かなかつた。彼らはしだいに正しい道がどういふものであるかに気づくようになった。そしてまたクロンスタットの活動を鼓舞してきた信念や精力や諸目的は、また彼ら自身のものでもあるということが大衆が理解するであろうその日の近づいていくことに對して、しだいに確信をもつようになつてきていた。

まさにこの時、クロンスタットは異常な、そしてまた熱にわきたつ行動に突入したのであつた。クロンスタットの人民は國のすべての地域にアシテーターと民衆のプロパガンジストをつきつきに送りはじめたのだ。彼らのスローガンと集中的な叫びは「すべての権力をソヴィエトへ」であつた。地方では、これらの密使は何十人となく捕縛された。しかしクロンスタットはその上にさらにつきつきに密使を送り込むことによつてそれに答えた。

まもなく彼らの努力は効を奏した。これまでケレンスキーを支持していたバルチック艦隊の水兵らは、ついにクロンスタットの「反革命

一方、政府の方はデモ隊を厳酷にたたく程充分に強いように思へなかつた。長びいた交渉の後——その間西方の側はそれぞれ悲惨な斗争の準備をしていた。(「クロンスタットは実際、ベトログラード攻撃の目的で大軍を形成した)——彼らはずいに同意するに至り、すべてが再び平和になつた。

この不成功に終つた「叛乱」のはっきりした特徴は強調しておく価値がある。ポリシエウイキは勢力的に優れた役割を演じた。デモ隊が採用したのは主として彼らのスローガンであつた。クロンスタット内部においてはポリシエウイキの代表が活動の主たるオルガナイザーであつた。水兵らは「もし党が活動を否認したらどうするの？」と聞いた。彼らは答えた。「我々は党が我々を支持するようにさせるだろう」と。しかし中央委員会は何の決定もしていなかつたし(むしろさしひかえようと決定していた)、またあるよく知られたポリシエウイキ黨員らは他の諸党派と交渉中であつたので(ポリシエウイキの指導者)は単に非公式にソヴィエトに参加していたのであつた。レーニンはバルコニーから激励の演説をしたのみでひっこんだ。トロツキーと他の指導者たちは、何の参与もせずひきさがつた。運動は彼らのものではなかつたし、彼らはそれを統制しなかつたし、それ故に、彼らにとつてそれは利益にならなかつた。彼らは自分達の時に氣を配つた。

ポリシエウイキの多くは装甲車に彼らの中央委員会のイニシアルの入つた大きな赤旗をつけて、それを示威行進の先頭におくことをぞんでいた。しかし水兵らはポリシエウイキ主催のもとに行動しているのではなく、彼らのソヴィエト主催のもとに、なのだといはなつて(「装甲車を後方へ送つた」)

「性」を非難している「信ずべき筋からの情報」に疑いをいだきはじめてたのであつた。彼らの氣持をきめさせようと彼らはクロンスタットに代表を送つた。ソヴィエトによって嚴肅に迎えられ、彼らは親しく住民と話し合い、住民の態度を知り、新聞や権威筋の欺瞞を見抜いた。この瞬間から二つの艦隊の間に、近密なる接触が確立されたのであつた。

更に前線にいる軍隊のいくつかの部隊はクロンスタットの評判が中傷によつてあまりに歪められてきたので、水兵らの意志がどのようなものかを知り、もし必要なら事情を正しいものにしようとクロンスタットへ代表を送つた。ものものしい人数からなるこれらの代表のうちの一人は正規の軍部遠征隊をつくつた。彼らはどんな事件にも間に合うように武器(大砲や機關銃さえも)をボートに満載してクロンスタットに到着した。彼らは事態を運命のままにしておいたのではなかつた。というのはいも彼らがうわさや新聞を信じていたならドイツによつて資金を与えられた「クロンスタット独立共和国」の防衛者達によつて発砲されていただろうと当然考えられるからである。彼らは海岸からいくらか離れたところに錨を降ろした。そして、最初の「全権委員」をのせた数艘の小さなボートをその都市にやつた。上陸するとこれらの人々は用心深く、まるで敵國に入った正規の偵察隊のように市へと進んでいった。

こんなことは、いつものようにヴソイエトによる厳密な歓迎会と親しみのある熱情的だが友愛に満ちた討論会のうちにすっかり終つてしまつた。水兵達は「遠征隊」のボートを訪れようと思つた。そして彼らは軍港へつれてこられ、お客達は戦艦を訪れた。夜になると彼らは「すべての権力をソヴィエトへ」と叫びながら、確信して前線へ戻

つていった。

しばしばこれらの代表達は水兵が前線における彼らの疲弊した部隊といれかわってはどうかと申し入れたのであった。そこでクロンスタットの人々は確固として彼ら自身の見解を説明した。「土地が農民に渡らない限り、革命が完全に勝利しない限り、労働者は守るべきものを持たないのだ」と彼らは言った。

コロニロフ將軍の軍隊がベトログラードにやってくる少し前に政治的形勢を勝ちとろうと努力して反動家たちが軍の幾つかの分隊に規律をつくりなおし、前線における死刑法を再成立させ、兵士達の委員会をぶちこわそうとした。クロンスタットはそれ故に武装蜂起の用意をしないとした。

同じ頃、ケレンスキー政府はリガ戦線を増援するとの口実でクロンスタットとすべての堡壘から重い大砲を移すことを決定した。水兵らの憤懣は爆発した。彼らはこの大砲が前線で何の役にも立たないことを非常によく知っていた。そしてまた彼らはドイツ艦隊がクロンスタットを攻撃しようとしていることも知っていた。彼らはそれを防禦しようとして待ちかまえていたのだ。それには大砲なしでは不可能なことだったのだ。政府の人々が事情にそれ程うまいとは信じられなかったから、彼らは攻撃される前夜にクロンスタットを武装解除させようというケレンスキーの決定のうちに、革命に対するあらゆるまな背信をみただであった。彼らはケレンスキー政府が、可能であればどんな手段をもってしても、クロンスタットとベトログラードをドイツの手に渡すことも辞せず革命を圧殺しようとしたのであることをはっきりと確信した。

クロンスタットは躊躇しなかった。船上で、堡壘で、工場で、抵抗

と叛乱の爲の計画を詳細にたてるために、秘密集會が開かれた。それと同時に毎日、何十人も水兵らがベトログラードに行き、大工場や小工場や兵舎をまわって公然と蜂起を説いた。

この恐しい敵対に對面して政府は考えなおし讓歩した。妥協が交渉され、ほんの小さな分隊だけが前線に行った。要するに水兵達はこの解決に喜んだのだ。なぜなら將校委員会の警戒のおかげで、彼らが侵透するのに成功していなかったただ一つの個所が前線だったからだ。それがこの一件で今や「クロンスタットの悪影響」がそこにも持ち込まれたのであった。

一九一七年八月のコロニロフの一揆の後、クロンスタットからきた水兵らは破壊という点で彼ら自身をはっきりそこから区別したので彼らに對する大衆の最後の不信頼の気持はぬぐいさられた。同時にケレンスキーの人氣は日毎に地に落ちていった。クロンスタットは正しくも政府に反抗し、反動主義者の陰謀を暴露し、だまされるままになつてはいなかったのだ、ということが至るところで理解され始めていた。

クロンスタットの精神的勝利は完全だった。このときから多くの労働者や農民の代表が真実の情勢についての啓蒙を求めて、助言と未來への示唆を要求してやってきた。そこを離れる時これらの代表達はプロバガンジストや文書を彼らの地方へ送ってくれるよう水兵らに頼んだ。クロンスタットにとってこれ以上の要求はなかった。そして間もなくクロンスタットから密使が数日間も送られないという田舎や地方はただの一つもないと誇張なしに言えたのであった。そして土地の直接収用、政府への服従の拒否、ソヴィエトの再選挙や合同、平和への決定的斗争や革命の継続(註一)を説いた。このように彼らのたゆみ

ない活動によってクロンスタットの人人は労働者や農民の組織や軍隊(註二)への革命的精神をしみこませていった。一方同時に彼らはすべての正当と認められない行動や、憎悪と個人的絶望感による行為に對して激しく立ちむかった。

註一 右派社会革命党とメンシエヴィキがボルシエヴィキにゆずって、ソヴィエトから追い出されたのはこの時期である。そしてまた次の(十月)革命の本質的な要素が激しく徐々に進んでいたのもこの時期である。レーニンはこのすべての情勢に接触しており、みずから彼の時にそなえていたのであった。

註二 我々はこの次のことをつけ加えよう。「このすべての活動と」同じ時期にバルチック艦隊は、進行中の革命の名において、ベトログラードに接近することを防ぐためにドイツ艦隊と数回の激しい戦いを行わねばならなかった。

革命が旧社会と斗っているすべての場所において、クロンスタットの人人は斗う陣列の中にいたのである。

第四章 クロンスタットにおける建設的活動

クロンスタットにおいて前ボルシエヴィキ時代が終る前に我々が忘れることのできないのは、武装斗争と他の緊急の仕事にもかかわらず非常に「建設的」な仕事がそこで完成されたということである。この分野においてクロンスタット、ソヴィエトは二つの重要な機関、すなわち技術及び軍事委員会とプロバガンダ委員会をつくった。

技術及び軍事委員会はソヴィエトの十四人の会員より成り、それに海上、運輸、労働者組合と艦船と堡壘からの数人の代表者が加わっていた。つづくわえるなら、特別人民委員の事務所が各重要堡壘にもう

けられた。これらの人民委員は堡壘とソヴィエトと委員会の接触を永続的に維持すること、堡壘の物資状態とその施設を監督することが仕事だった。

委員会はクロンスタットの防衛とその技術的な手段に関するすべてのことにたずさわった。特にそれは労働者の全面的武装化を行わせることと、彼らを軍隊に編成することと、軍事的教練をすることに責任があった。それはすべての戦斗部隊の日誌を保管し、また商船や積荷や乗客の状態も監督した。それは船の修理の仕事も指導したり、広い大砲の倉庫をいっぱいにしていては鉄くずを管理したりした。

プロバガンダ委員会は、非常に重要視されていた。それはクロンスタットだけでなく、国中に確かにゆきわたる広さでもって多かれ少かれ離れた地方においてまで偉大な教育活動を遂行した。毎日のように演説者やアシテーターや講師やプロバガンジストを要求する声がいりるな堡壘からやってくる。なかには船で三十キロメートルもいったところやあるいはベトログラードの郊外からやってくる。

委員会はすべての文筆関係の仕事、特に政治的、社会的な仕事(社会主義の、共産主義の、アナキズムの)また特に一般及び村落の経済状態をあっかつた科学的普及化の仕事を注文し、収集し、分配した。各々の水兵や軍人達は自分たちの金を出して小さな図書文庫をつくりまず最初に注意深く自分たち自身が読み、その後「彼自身の田舎」、彼の生まれ故郷へ持ち帰る計画をたてた。

選択してプロバガンジストの中から送りこむということについてとられた方法は注目するものがある。どんな工場も軍隊もあるいは艦船も地方へ大衆プロバガンジストをおくったのだ。この資格をもって旅行しようとするそむどんな人も、彼の部隊やあるいは艦船の総

会へ彼の意志を宣言しなければならなかった。もし何の異議もなければ部隊ないし艦船の委員会は彼に臨時の許可を与えた。そこで彼はプロバガンダ委員会によって保証され、ソヴィエトの書記のところへ行つた。もしソヴィエトの総会で彼を個人的によく知る人々たちによって彼の志願が支持されたり、またもし誰も彼に革命的あるいは道徳的理由で反対をとらなければ、ソヴィエトは彼にソヴィエトの名において正式な最終的な許可を与えた。その許可は彼がどんなところへいくにも安全通行券となつた。それら使節の費用は労働者の賃金から自発的に募集した金によってできたソヴィエトの金庫から支払われた。

ほとんどいつもプロバガンジストは農民たちへのみやげものとして特にクロンスタット労働者のつくった産物をもつていった。これらの労働者、特に「おくれた故郷」の農民たちのことを気づかう者たちは彼らの暇なときに地方で必要な品物——釘、馬靴、鎌や、スキーなど——をつくる工場をつくつた。軍人や水兵の社会主義者たちはそれらの仕事を手伝つた。その事業はクロンスタット労働者組合という名をもつた。それはすべての都市住民に彼らの使わない鉄くずを持っていくように要求した。クロンスタットの密使は農民へプレゼントする産物を分けるのに地方ソヴィエトを通じることを決して忘れなかった。その交換にパンと、自由のために斗争している都市を支持することを約束しようという農民たちからの熱烈な感謝の手紙がクロンスタットソヴィエトに殺倒した。

(興味ある建設の) もう一つの事業は、クロンスタットの住民達が海岸と都市との間の空地を菜園に利用しようとした時にできた一種の園芸コンミュニオンであった。同じ地域に住んでいた、同じ工場で働いている約五〇人からなる都市の人々のグループが共同して、

ス機関のどんな集中化をも行った。民兵の組織は委員会のそれと類似している。それぞれの家屋はその借業者からとられた民兵隊の兵士のグループを持っていた。街民兵、地方民兵等々もあつた。公共の奉仕機関のすべては驚くべきほど役目を果たした。というのはそれらに責任をもつ人々は個人的好みやあるいは個人的態度から行動したのでそれ故に良心的に聰明に彼らの活動(註1)の重要さをよく知っていたのだからだ。このようにして住居やすべての都市の奉仕部門の完全な社会化へ進むことにおいて、クロンスタットの労働者は同時に平和的な創造的な政策の複合化を遂行した。それは社会生活の真の基礎を根本的に変革することを目指していた。(註2)

註1 一九一七年の八月から十一月にかけて当時ベトログラードに住んでいた筆者は、しばしばクロンスタットについて講義をし、また直接人々の自由な強烈な生活を見た。いくつかの詳細な部分はクロンスタットに住み活動的にすべてのその仕事にたずさわっていたもう一人の斗士によって書かれたロシアのパンフレットからとつた——E・ヤルチュク著「ロシア革命におけるクロンスタット」このパンフレットはまだ英訳されていない。

註2 彼らが権力を握つたとき、おのずからボルシエウイキはしだしいだいにこの自治的な管理を清算し、官僚によって統制された機械的な統計的な組織に置きかえていった。

◎以下次号 目次

- 第五章 クロンスタットとボルシエウイキ政府の最初の衝突
- 第六章 ベトログラード労働者の蜂起
- 第七章 クロンスタットはベトログラードの労働者を支持する

(つづく)

その土地を耕作する仕事にかかった。これらの委員会の各々には都市から抽せんで土地の一片をうけとつた。委員会の人々は専門家や農耕方法研究家や測量技師に手伝ってもらつた。これらの委員会の会員たちにとつての利益のすべての問題は代表者会議か総会で討議された。食料準備委員会は種の分配を引受けた。道具類は都市にいる留守隊によって、また委員会の会員自身によって供給された。

肥料はまた都市で供給した。これらの台所用菜園は一九一八年以後における飢饉の間、特にクロンスタットの住民に重大な利益を施した。(菜園をとりまいて形づくられた共同体もまた住民達をより近密にさせた。この自由な共同体の働きは非常に活発であつた。それは一九二一年にもまだ存続しており、ボルシエウイキが(クロンスタットにおいて)破壊できなかった唯一の独立の設立物として長いこと残つていたので。クロンスタットにおける公共福祉や市民生活に関するすべての事柄は委員会や民兵を通じて市民自身の手で処理された。そしてすこしずつ彼らは住民やすべての都市の奉仕部門の社会主義化へと進んだ。一般的にいて、クロンスタットやボルシエウイキが政權をとる以前のロシアの他の地方においては一軒の家の住民達は第一にくつかの居住者の集會を組織した。それらの集會の名前は家屋借業者委員会といひ、それは精力的に必要な役目を履行できる能力のある人々から成つていた。その委員会は家屋の維持やその居住者の福祉を監督したり、日夜の門番を指示したりした。各家屋委員会は街委員会へ委員の中から一人の代表を送つた。その委員会はその街に関するすべてのことさらに責任を持つた。それから地方委員会があり、区委員会があり、最後に市委員会があつた。市委員会は市全体の利益に関するすべてのことに責任をもち、自然な論理的なやり方で必要なサーヴィ

- 第八章 斗争中のクロンスタット
- 第九章 クロンスタットへの最後の攻撃
- 第十章 クロンスタットの教訓

思想 第5号 自由 第4号

大杉栄と労働運動(上) (水沼辰夫) 日本におけるアナルコ・サンジカリズムの衰退(遠藤斌) 現代労働運動の問題点(新田俊之) 社会と国家(下) (M・ブーバー) マルクスシズム・自由および国家(中) (M・バクーニン)

〔大逆事件特集〕 幸徳秋水の直接行動論(遠藤斌) 大逆事件と文学(小松隆二) 萩原朔太郎をめぐつて(伊藤信吉) 新宮と田辺(河本乾次) ぼくの 大逆事件(向井孝) 「大逆帖」覚え書(近藤真柄) 岡山大逆紀行(森長英三郎) 直接行動とテロル(大沢正道) テロリズムについて(村上信彦) 大杉栄と労働運動(水沼辰夫) ・社会と国家(下) (M・ブーバー) マルクスシズム・自由および国家(下) (M・バクーニン)

各一〇〇円(千一六円)
東京都渋谷代々木二ノ二〇

自由思想の会